

## 44 明治新政府初外交の場

中央区海岸通29(神戸地方合同庁舎前)

- ▶ 29、30で紹介しました神戸事件は、慶応4年(1868)1月11日に起こりましたが、徳川幕府に代わり、明治新政府樹立後初めての外国との会見が、慶応4年1月15日(1868年2月5日)神戸税関の前進である「運上所」にて行われました。
- 事件は、備前藩に非があることは明らかで、明治新政府側は不利な状況での初外交でした。新政府の代表は、公家の東久世通禧(ひがしくぜ・みちとみ)です。
- そのほか同席したのは、岩下佐次右衛門(薩摩)、寺島陶蔵(薩摩)、陸奥陽之助(土佐海援隊)、伊藤俊輔(長州)、吉井幸輔(薩摩)、片野十郎(長州)の6名でした。
- 東久世は、明治天皇からの国書を各国公使に渡しました。
- また、神戸事件に触れ、「政府は神戸において外国人の生命と財産を保護する。備前の処罰を主張する諸外国代表の要求を受け入れる。」と約束しました。
- この席上、徳川鼻祖だったフランス公使レオン・ロッシュが「こんな連中をあてにしてはならない」と興奮したところをイタリア、プロシアの公使になだめられるという出来事がありました。
- 外国交際に対する新政権の態度が、初めて試される機会だったのですが、成功裡におさめました。



<東久世通禧> 天保4年(1833)~明治45年(1912)  
幕末期、尊攘論を唱え急進派公卿のうちのひとりでした。文久3年(1863)8月18日の政変で、三条実美らと共に、京を追われ長州に落ちます。(七卿落ち)  
王政復古となり再び京に戻り、外国事務取調掛となります。その後、岩倉使節団に加わります。

## 45 神戸税関発祥の地

中央区海岸通29(神戸地方合同庁舎前)

- ▶ 兵庫開港の勅許を得てから、外国人居留地、開港においての貨物の手続き、関税の徴税などの運上事務及び外交事務を処理する機関として運上所が設置されました。
- 慶応3年12月7日(1868年1月1日)運上所において開港式が開催されました。
- 明治5年(1872)5月には、運上所が大蔵省の所管となります。明治6年1月、神戸運上所は神戸税関と改称されました。



▶ 文久3年4月23日、勝海舟は第14代将軍徳川家茂の摂海巡覧に随従し、神戸に海軍操練所の建設を言上し、家茂から即決の大英断を得、翌日、御取建掛を命ぜられました。勝海舟日記には次の通り記載されています。

文久三年四月二十三日

「(前文省略)九ツ時前、和田ヶ崎へ御着船。(途中省略)和田明神の社へ御休息、(途中省略)操練所御開き、且、土着の者置くべき事を言上、直ちに英断あり、御前に於て仰せ出され、議悉く成る。」

文久三年四月二十四日

「(前文省略)本日、神戸村土着の士、且、操練局、造船所、御取建掛り仰せつけらる。

勝麟太郎

摂州神戸村、海軍所、造船所御取建御用、並びに摂海防禦向き御用、これを仰せつけらる。

津田近江守

勝麟太郎

松平勤太郎

摂州神戸村海軍所、造船所、そのほか御取建相成り候につき、右御入用並びに絵図、取調べ、差出さるべく候事。

3日後の27日には、海軍塾開塾の許可も出ます。

それから建物や附属の設備が完成するまで約1年かかり、元治元年(1864)5月28日、操練所開所の交付が出され、運営が開始されます。畿内に住む旗本・御家人の子弟など幕臣と西南諸藩からの有志が募集されました。

同年6月の池田屋の変、7月の蛤御門の変で、勝海舟の子弟が反幕府側に加わっていた事により同年11月海舟は免職となります。その直後、勝塾(海軍塾)の塾生は四散します。

海軍操練所も翌年元治2年(1865)3月18日、閉所の沙汰が出ます。

勝海舟が将軍への直言により劇的に実現した海軍操練所でしたが、短命に終わってしまいました。



神戸海軍操練所の鬼瓦(神戸市立博物館蔵)



神戸海軍操練所の寮舎(古写真)

## 47 神戸電信発祥の地

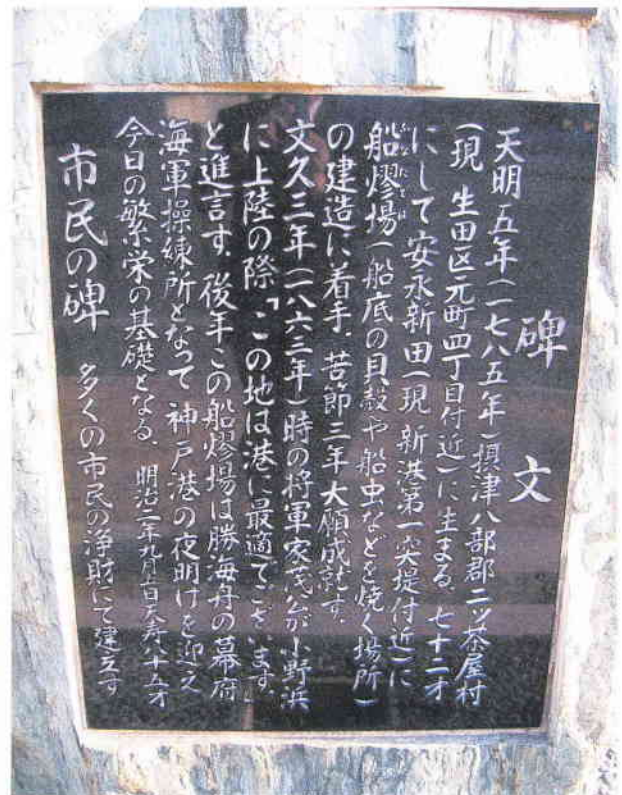
中央区新港町16



## 48 網屋吉兵衛顕彰碑

中央区新港町7(川西倉庫前)

- ▶ 網屋吉兵衛は天明5年(1785)、二つ茶屋村城下町(現在の元町4丁目)に生まれました。丁稚奉公をした後、呉服商を営み、72才になってこの付近に、長年の夢であった船塀場(現在のドック=船底についた貝殻や船虫などを焼いて船の修理をする所)の建設に着手しました。私財を投じ資金を調達して安政2年(1855)に竣工しました。その後、負債返済のためにドックの所有権は神戸村に移され、彼はその一支配人となりましたが、このドックは海軍操練所のものとして活用されました。勝海舟が操練所をこの地を選んだのは、もともとこの船塀場があったからでした。



海軍營之碑

元治元年(1864)10月8日、勝海舟は海軍操練所がある小野浜に記念碑を建立しようとしたが、目的は達せられず、海舟の寓居先であった生島家が保存する事となりました。大正4年(1915)に寄贈され、神戸市中央区諏訪山町1にある諏訪山公園金星台の地に建てられました。

ここにある碑は、諏訪山にある海軍營之碑と同じ形に造られています。生島家で保存されていた碑が諏訪山へ移転する際、巨大な鞆石にはこみ今の形になりました。このため、原碑の側面に刻まれていた松平春嶽の歌は永久に見ることができなくなりました。記録によりますと次のような歌が刻まれていたそうです。

そのかみ神戸のみなどに勝大人の建られし石ふみのあるかなきに埋れしを  
こたび生島氏の庭に更にたてられしと聞てよめる。

君なくは世に遠長く石ふみの ときは堅岩に残らさらめや 源 慶永



そのほか、坂本龍馬、陸奥宗光、伊藤博文などこの地で活躍した人物を讃える碑があります。

